

2. 民俗舞踊と地域アイデンティティー

— 沖縄の民俗舞踊エイサーの事例 —

岡本 純也

I. はじめに

いつから民俗舞踊は保存を必要としない存在になったのであろうか？本報告で取り上げる沖縄の民俗舞踊「エイサー」を見る限り、そのような疑問が生じる。しかし、ここで既に「民俗舞踊＝伝統的生活に根ざした舞踊＝近代化の過程では終息する存在」という図式で民俗舞踊を捉えている研究主体の存在に気づく。ホブズボウムらによって、政治的な意図の下に「創造される伝統」がおおいにありうるのだと指摘された現在において、民俗舞踊を「地域に古くから伝わる独自の文化」として無批判に捉えてしまう姿勢は、主体の意図に関わらず政治性を帯びた言説を生み出すとして批判される(E. ホブズボウム, T. レンジャー編 1992年)。また、橋本は民俗芸能研究の文脈で、「民俗芸能」という術語にまつわる「始源」「古風」「伝統」「素朴」……といった「イデオロギー」を指摘し、そのようなイデオロギー性を擁護する姿勢をとっていた従来の「民俗芸能研究」を脱-神話化したところに新たな民俗芸能研究の未発の主題が提出されると主張する(橋本 1993年)。

ここで研究対象とする沖縄の民俗舞踊「エイサー」も、おそらく従来の民俗芸能研究では主題とされにくい、すなわち「民俗芸能」の範疇で捉えにくい民俗舞踊であろう。戦後になって大きくその様態を変化させたこの舞踊は、一見したところ「古風」「伝統」「素朴」といった言葉に馴染まないようにみえるからである。しかしながら、橋本の主張するような従来の民俗芸能研究を脱-神話化した視点に立てば、大会場において数万の観衆を目の前にして100人以上の青年が踊る現在のエイサーが、過去の沖縄の生活の中から生まれた民俗舞踊の今日的姿であるにとらえられるのである。必要なのは、過去を表象するものとしてだけ民俗舞踊をとらえる視点でも、その現在の様態だ

けを見つめる視点でもなく、当該舞踊のもつ核となる部分を探求しながら過去と現在を往復する視点であろう。

II. エイサーとは

エイサーは、旧盆の時期に沖縄本島各地で踊られる青年男女による集団舞踊である。この舞踊は本土の念仏踊りの流れを汲むといわれ、旧盆に帰ってくる祖霊を供養するという名目で踊られる。踊られる曲の中に一定の念仏歌や門付歌が含まれる地域が多いことから、一説には、浄土系の下層宗教者が沖縄各地に広めたとされる(池宮 1990年)。

地域によっては旧盆の初日(旧暦の7月13)や中日(14日)から踊ることもあるが、多くの地域では15日の夕方、祖先の霊を送るための「送り火」が焚かれるころから、字の青年会によってエイサーは踊られる。エイサーが踊られる場所は集落内の旧家の庭や拝所(集落の神が祀られている場所)などである。

エイサーは戦後になって大きく変化したと研究者や評論家などによって指摘される(池宮 1990年, 小林 1991年, 渡邊 1992年, 宜保 1984年)。彼らが指摘するエイサーの変化とは、エイサーを踊る際に使う民謡、楽器、衣装、踊りの隊形などの変化である。

しかしながら、その一方で、この舞踊が踊られる際には必ず「地域独自の特色ある伝統芸能」「古くから伝承される民俗舞踊」といった言葉が冠せられる。エイサーに関しては「変化をしながらも踊られる地域を表象する伝統」という一見矛盾するような表現が許容されているのである。

そこで、本小論では、地域アイデンティティー確証の場でありながら常に変化をしていくという、この民俗舞踊のあり方がいかにして成立したのかを戦後の都市型エイサー祭りの歴史に照らし合わ

せて考察していく。

Ⅲ. ムラのまつりから都市のまつりへ

上述したエイサーの変化を指摘する研究者の多くは、戦後に始まった「エイサーコンクール」がエイサーの変化を加速させた論じている。この「エイサーコンクール」とは学校のグラウンドや陸上競技場などの大会場に各地域の青年会があつまり、エイサーを競い合うという趣向のまつりである。基本的にエイサーは集落ごとの旧盆の行事に登場する舞踊であり、いくつもの地域のエイサーが一度に集まりお互いに踊りを見せ合うという場面は従来の文脈では存在しなかった。そういった意味で、この「エイサーコンクール」は都市型の「エイサーまつり」であり、それまでにはなかった文脈をエイサーに提供したことになる。しかしながら、この「都市型のまつり」も従来の「村落レベルのまつり」とまるで断絶されていたわけではなく、一定の連続性の中でとらえられる。そしてこの「村落レベルのエイサー」と「都市型のエイサー」の連続性こそが「変化をしながら地域を表象する」という現在のエイサーの在り様を規定していると考えられるのである。

1. エイサーコンクールの成立

沖縄全域のエイサー団体が参加するエイサーコンクールが開始されるのは、1956年コザ市（現沖縄市）においてである。それを追って1964年に沖縄県青年団協議会主催のエイサーコンクールが那覇市を拠点に始まる。それぞれ「米琉親善全島エイサーコンクール」「全沖縄エイサーコンクール」という名で始まり、途中競技会形式から順位を決めない「まつり形式」に内容を変更し、名前も「全島エイサーまつり（1977年）」「青年ふるさとエイサー祭り（1974年）」と改め、現在まで継続して開催されている。

全沖縄レベルの最初の競技会であるコザ市のエイサーコンクールは、1956年8月22日に市当局、商工会、文化協会、青年会によって「打ち合わせ会」が催され、23日の新聞で出場団体を募り、26日の午前10時からコザ小学校グラウンドで開始されている（沖縄タイムス1956年8月23日、26日版）。

このコンクールは、結果的に9団体の青年会が参加し、3万人の観衆を集めたと新聞は報じている（沖縄タイムス1956年8月27日版）。

当時の新聞が示すように準備期間をおかないで出演団体、観衆が容易に集まり、大会場を利用した都市型のエイサーまつりが成立する前提には、村落レベルの旧盆の習俗としてのエイサーがなくてはならなかったと考えられる。

この年の旧盆は8月18、19、20日の3日間であったのだが、26日のコンクールに参加した青年会は、旧盆の日程に合わせて練習をしており、参加団体募集の知らせがとどいたときには既に準備ができていたのである。

このように「都市型のエイサーまつり」は村落の習俗の上に成立したため、それまでのエイサーのあり方が新たな文脈へも持ち込まれることになる。いや、「コンクール」という文脈さえもが、村落の習俗の中に用意されていたのである。

そこで次に、都市型のエイサーまつりが成立する以前のエイサーについてみる。

2. コンクール以前のエイサー

エイサーに関する先行研究が少ないため、ここでは1992年から調査を開始した与勝半島周辺のエイサーの事例を紹介しながら考察を進める。

コザ市のエイサーコンクールの開始当初の優勝団体をみてみると、第1回、第2回が勝連村比嘉、第3回が勝連村平敷屋、第4回が与那城村屋慶名と与勝地域の青年会が続き、第5回目にやっとコザ市の園田青年会が優勝している。開始当初のエイサーコンクールで与勝地域のエイサーがよい成績をおさめたのには、それぞれの集落における旧盆のエイサーの踊られ方が関係していると考えられる。

比嘉、平敷屋、屋慶名のエイサーに共通することは、戦前から旧盆の習俗としてエイサーが踊られており、その際に集落を東西の二団体に分けて「踊りくらべ」が行われていたという点である。また、この「踊りくらべ」の一番の争点が年ごとに新しく創られるレパートリーにあったことも共通している。

戦前の比嘉や平敷屋では、旧盆が近づいてくると東西のグループの熟練者が人のあまり行かないような場所へ行き、相手に「手を盗まれないように」その年の流行の民謡に振り付けをし、密かに練習がされたということである。相手の踊りの「手を盗み」について「半殺し」にされた者もいたという話しはよく聞く逸話である。

与勝地域ではエイサーコンクール以前からそのような厳しい「踊りくらべ」がなされていた。コンクール開始当初に、他の集落のエイサーを圧倒し、上位入賞を果たしたのもこのような集落内の習俗を考えると納得できる。

離島地域である比嘉集落は、戦後、青年人口の減少によりエイサーの「踊りくらべ」や新しいレパートリーの作り替えは行われなくなるが、平敷屋においては現在でも継続して東西それぞれが、固定されて演じられるレパートリー七曲に加えて、毎年新しいレパートリーを二曲ずつ作り替えて踊っている（岡本 1994年）。屋慶名では1964年に東西のグループは統一されるが、レパートリーの作り替えは現在でも行われている。

コザ市が戦後に主催した都市型のエイサーまつりが競技会形式で成立した背景には、これまで見てきたような与勝地域のエイサーにみられる集落内の「踊りくらべ」の習俗があったと考えられよう。ただ、コザ市周辺のエイサーにも戦前からそのような習俗がみられたかどうかは今後調査しなくてはならない課題ではある。だが、舞踊を競技として踊り、それを観衆がみつめるという場が戦前からエイサーに関わって存在したということは事実である。

3. コンクールによる変化の加速

与勝地域の「踊りくらべ」とコザ市のエイサーコンクールの連続性を捉えるうえでもう一つ重要な点がある。「踊りくらべ」の一番の争点が、年ごとに取り入れられた流行の民謡にあったという点である。時には振り付けだけでなく、歌の歌詞までも作り替えたり、エイサー用にオリジナルの民謡を創作したりという具合に、その年の青年会の工夫が期待される「踊りくらべ」の在りようは、

エイサーコンクールの文脈へも持ち込まれることになる。

当初、エイサーコンクールは、審査員の判定により順位づけがなされ、「入賞チーム」には順位ごとに差をつけて賞金が渡された。審査には、大会ごとに審査規定を決め、項目ごとに点数化し、合計点数によって順位を決定するという方法がとられていた。新聞に掲載された審査規定の一例をみると「一、服装（品位、美的、簡素）、二、体形(マ)（整然、変化、美的編成）、三、態度、技能（団体行動、精練度、明朗、品位、威勢）、四、伴奏（技能、音声、品位、明朗、節度）、五、変化（従来—古的、現代的）」となっている（琉球新報1958年8月31日版より）。

エイサーコンクールのこれらの審査規定は、各地域の青年会の工夫を推奨するものである。この点で、コンクールは、年ごとの青年の工夫を一番の見所としていた与勝地域の「踊りくらべ」と連続すると考えられるのである。

以下に、第五回コンクールで二位に入賞し、第六回で優勝を果たした赤野青年会の第八回大会の時の紹介新聞記事の一部を示す。そこには、いかに毎年変化をつけた踊りを完成させるための努力がはらわれているか、そしてそれがいかに素晴らしいポイントとして評価されているかがみてとれる。

「赤野のエイサーは“エイサーどころ中部”でも独創的な力強いおどりとして知られている。出場するたびごとにおどりの隊形や楽器、曲節が改良され新鮮さが加えられており、見る人の目を楽しませる。中でも隊列の変化は円形から十字形、放射形、縦形と多様でその美しい調和のとれた隊形のうつり代わりは巧妙と定評がある。……

現代にマッチしたエイサーという観点から衣装も昔ながらの紺地姿（クンジー）をやめて普段着のワイシャツにズボンという合理的なものにしましたと青年会長の金城宜正さんは赤野エイサーの現代性と合理性を強調する。こうした現代感覚が大衆の気持ちとピッタリとする由縁だろう（琉球新報1963年8月28日版）。」

このようにして、年ごとの青年会の工夫が見所となる「踊りくらべ」の伝統の上に成立したエイサーコンクールという新たな文脈の中で、地域独自のエイサーの特色を出そうという青年会の努力が、結果としてそれぞれの地域のエイサーの大きな変化をもたらすことになる。民族音楽学の立場から小林は、一つの集落に、四世代で異なる様式のエイサーが踊られるという事例さえあることを報告している（小林 1991年）。また、渡邊は太鼓の入らない手踊り形式の盆踊が太鼓を取り入れたエイサーに短期間で取って代わられたという事例を報告している（渡邊 1992年）。

IV. アイデンティティーと民俗舞踊

そもそも一つの集落内で行われていた「踊りくらべ」とは、踊りを通して自己と他者の相違を確認する場であったと考えられる。

平敷屋の場合、「西は女性的で柔らかな踊り」、「東は男性的で力強い踊り」と表現されるのであるが、他の地域の者にとってはその違いは分からないのである。地元の者は「手の上げ方や腰の落とし方が全然違う」とその違いを指摘するが、報告者も含めた外部の者には理解ができないのである。他の地域の者に理解できないような微妙な差異を解する「まなざし」とは、いつでも踊り手になりうる観客がもつそれである。その前提となるのは、自分の含まれる集団が共有する「踊りのコード」を身体化しているという状態である。ここでいう「踊りのコード」とは、その踊りの踊り方の「文法」としてとらえられる。（この点に関しては別のところで詳しく論じている。岡本 1994年）

他の地域に住む者が解さない微妙な差異を読みとる観客は、自己の「踊りのコード」と踊り手の踊りから読み取れる「踊りのコード」を照らし合わせることによって他者の踊りの差異を明確に感じられるのである。新しい民謡を取り入れるというその年ごとの工夫も、同じ「踊りのコード」を共有する他の世代の差異の感覚を見込んだ、青年世代の自己主張であり、自己の存在表明であると考えられる。

そのように「踊りくらべ」をとらえると、多くの地域の青年会が集まるエイサーコンクールも、同様に、それぞれの地域の青年が、自分の身体に刻み込まれた「踊りのコード」を参照しながら、他の地域のエイサーをみつめ、自己と他者の差異を身体のレベルにおいて実感する、そのような場としてとらえられるであろう。

以上みてきたように、戦後はじまったエイサーコンクールは、踊りによるアイデンティティー確認の場としての「踊りくらべ」の伝統の上に成立したと考えられる。ただし、一つの集落内における踊りの順位付けは、言葉にしなくとも共有されるであろうが、多くの地域が集まるコンクールにおいてはそのようにはいかない。審査規定を設け、点数化をして客観的に評価をしようという試みがなされた。しかし、それぞれの地域がもっている美的評価基準も含む「踊りのコード」は、普遍化できなかったのである。再三の審査結果への抗議の下、エイサーコンクールは、順位を決めない「まつり形式」へ移行することになるのである。

【参考文献】

- 小林幸男, 1991年, 「沖縄本島北部の女エイサー」『民俗音楽』第10号
- 橋本裕之, 1993年, 「民俗芸能研究という神話」『課題としての民俗芸能研究』, 民俗芸能研究会/第一民俗芸能学会編, ひつじ書房, 3~15ページ
- 宜保榮治郎, 1984年, 「今、なぜエイサーなのか」『エイサー入門』, 琉球新報社, 6~8ページ
- E. ホブズボウム, T. レンジャー編, 1992年, 『創られた伝統』, 紀伊國屋書店
- 池宮正治, 1990年, 『沖縄の遊行芸—チョンダラーとニンブチャー—』, ひるぎ社
- 渡邊欣雄, 1992年, 「沖縄の文化変化—生活の近代化と知識の変化の二〇年」『地理』, 37/5